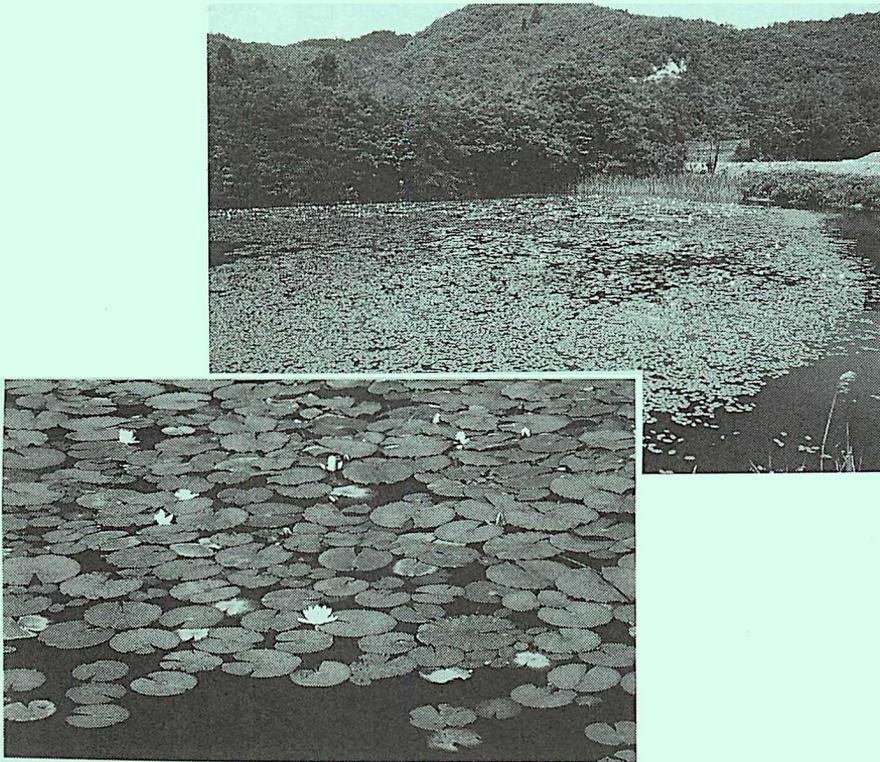

水草研究会会報

59号(1996年10月)



Bulletin of Water Plant Society, Japan

No. 59 (Oct. 1996)

水草研究会

目 次

津久井公昭・山崎正夫：酵素電気泳動法による
ミクリとナガエミクリの同定手法について 1

上 赤 博文：1995年と1996年に佐賀平野で発生したオニバスについて 5

久 米 修：香川県におけるオニバスの生育状況 3.10

長 井 真 隆：黒部川扇状地湧水地帯の水生植物15

山本博子・藤井伸二：ポタンウキクサの種子越冬と発芽の記録17

水草研究会第18回全国集会報告18

文献リスト，他

〔表紙写真〕

在来種を脅かすスイレン（兵庫県宝塚市，1996年6月）

植物の種を絶滅に追い込む二つの主要な原因は，生育環境の破壊と採集である。水草の場合は，水域の埋め立てや改修工事，水質の悪化などによる生育環境の消滅と環境悪化が多く種を危機的状況に追い込んでいる。ところが，最近になって新たな要因が在来種の消滅に拍車をかけるようになっている。それは移入種の問題である。魚の世界におけるブラックバスやブルーギルの例は端的に問題の所在を示しているが，水草の世界でも，危険な状況を招きかねない予兆をあちこちで見かける。

写真は，山間の自然度の高い池ではびこりはじめたスイレンの栽培品種である。在来のヒツジグサも生育するが繁殖力ではスイレンに及ばず，隅に追いやられようとしていた。このスイレンは地元の「篤志家」が入れたにちがいない。なにしろ周辺の池にも，ことごとく同じスイレンが生育しているからである。もちろん，この地区の池を美しくしようという善意に基づくものであろう。

次々と導入される外来のアクアリウム・プラントの逸出も跡をたたない。こういう場合，どのように対処したらよいのか。困ると言ってもなかなか理解してもらえないから始末が悪いのだが，どのような問題点があるのかを広く訴えるしか，解決の道はないのだろう。

写真と文 角 野 康 郎